

雨ばけ

泉鏡花

青空文庫

あちこちに、然るべき門は見えるが、それも場末で、古土塀、
 やぶれ垣の、入曲つて長く続く屋敷町を、雨もよひの陰気な
 暮方、その県の令に事ふる相応の支那の官人が一人、従者を
 従へて通り懸つた。知音の法筵に列するためであつた。
 ……来かゝる途中に、大川が一筋流れる……其の下流のひ
 よろくとした——馬輿のもう通じない——細橋を渡り果て
 る頃、暮六つの鐘がゴーンと鳴つた。遠山の形が夕靄とともに
 に近づいて、麓の影に暗く住む伏家の数々、小商する店には、
 早や佗しい灯が点れたが、此の小路にかゝると、樹立に深く、壁
 に潜んで、一燈の影も漏れずに寂しい。

前途ぜんとを朦朧もうろうとして過よぎるものが見える。青せいぎゆう牛うに乗のりつて行ゆく。

……

小形の牛だと言ふから、近頃青島せいとうから渡来とらいして荷車にぐるまを曳ひいて働くのを、山の手でよく見掛ける、あの若僧わかぞうぐらゐなのだと思へばいい。……荷鞍にぐらにどろんとした桶おけの、一抱ひとかかえほどのなをつけて居る。……大なる雨笠おおきあまがさを、ずぼりとした合羽着かっぱた肩かたの、両方りょうほうかくれるばかり深く被かぶつて、後向うしろむきにしよんぼりと濡ぬれたやうに目め前さきを行いく。……とき／＼、

「とう、とう、とうく。」

と、間あいだを置いては、低く口の裡うちで呶つぶやくが如ごとくに呼よんで行いく。

私は此これを読よんで、いきなり唐土もろこしの豆腐屋とうふやだと早合点はやがてんをした。

……ところ 処そが然そうでない。

「とう、とう、とう、とうく。」

呼よびこえ声こえから、風なり体なり、恰かつこう好こう、紛あぶられもならい油あぶら屋やで、ああの揚あげもの油あぶらを売うるののだささうである。

「とう、とう、とうく。」

穴あなから泡あわを吹ふくやうな声こゑが、却かえつて、裏うら田たん圃ぼへ抜ぬけて変かに響ひびいた。

「こらく、片かたよ寄よれ。えゝ、退どけく。」

威い張ばる事ことにしかかけては、これこゝが本ほん場ばの支し那なの官くわん人にんである。従じゆ者わが式かたの如ごとく叱しかり退どけた。

「とう、とう、とうく。」

「やい、これ。——殿様のお通りだぞ。……」

笠さへ振向けもしなければ、青牛がまたうら枯草を踏む音も立てないで、のそりと歩む。

「とう、とう、とうく。」

こんな事は前例が嘗てない。勃然としていきり立つた従者が、づかく石垣を横に擦つて、脇鞍に踏張つて、

「不埒ものめ。下郎。」

と怒鳴つて、仰ぎづきに張肱でドンと突いた。突いたが、鞍の上を及腰だから、力が足りない。荒く触つたと言ふばかりで、その身体が揺れたとも見えないのに、ぽんと、笠ぐるみ油売の首が落ちて、落葉の上へ、ばさりと仰向けに転げたのであ

る。

「やあ、」とは言つたが、無礼討御免ぶれいうちごめんのお国柄くにがら、それに何、

たかが油売の首なんぞ、ものの数ともしないのであつた。が、主しゆうじゆう

従じゆう ともに

一 驚いっきようを吃きつしたのは、

其の首のない 胴どう 軀むくろが、

一 煽あおり鞍おに煽あおると斉ひとしく、

青せいぎゆう 牛あしの脚はやが疾さつく成かつて颯さつと駈かけ出だ

した事である。

ころげた首の、笠いっしよと一いっしよ所に、ぱたくと開あく口より、眼めだま球たまを

くるくると廻みして見み据すゑて居すた官人くわんにんが、此こゝの状さまを睨にらみ据すゑて、

「奇怪ぢや、くせもの、それ、見届みとける。」

と前に立たつて追掛おいかけると、ものの一町ちやうとは隔へだたらぬ、石垣いしがきも

土堀どべいも、葎むぐらに路みちの曲まがり角かど。突つき当あたりに大やきな邸しきがあつた。……

其の門内もんないへつツと入ると、真正面の玄関みぎわきの右傍みぎわきに、庭園おもむに赴おもむく木戸際きどぎわに、古槐ふるえんじゆの大木たいぼくが棟むねを蔽おほうて茂もつて居た。枝の下むくろを、首くびのない軀むくろと牛うしは、ふと又また歩あを緩ゆるく、東海道とうかいどうの松並木まつなみきを行なく状さまをしたが、間あいの宿しゆくの灯ひも見えず、ぼツと煙えんの如ごとく消えたのであつた。

官人くわんにんは少時しばしば茫然ぼうぜんとして門前もんぜんの靄もやに亘たたずんだ。

「角助かくすけ。」

「はッ。」

「当家とうけは、これ、齋藤道三さいとうどうさんの子孫こそんでもあるかな。」

「はッ。」

「いやさ、入道にゆうどう道三どうさんの一族いちぞくでもあらうかと言ふ事ぢや。」

「はツ、へゝい。」

「む、いや、分らずば可し。……一応検べる。——とに角いそいで案内をせい。」

しかし故らに主人が立会ふほどの事ではない。その邸の三太夫が、やがて鍬を提げた爺やを従へて出て、一同槐の根を立囲んだ。地の少し窪みのあるあたりを掘るのに、一鍬、二鍬、三鍬までもなく、がばと崩れて五六尺、下に空洞が開いたと思へ。べとりと一面青苔に成つて、欠釣瓶が一具、さゝくれ立つた朽目に、大きく生えて、鼠に黄を帯びた、手に余るばかりの茸が一本。其の笠既に落ちたり、とあつて、傍にもものこそあれと説ふ。——こゝまで読んで、私は又慌てた。化けて角の生えた蛞蝓だ

と思つた、が、然うでない。大なる蝦蟆が居た。……其の疣一つ、どうもん堂門の釘かくしの如しと言ふので、巨さのほども思はれる。がまなわちしきゆなわちのひとなり 古釣瓶には、その槐の枝葉をしふるつるべ 蝦蟆即牛矣、菌即其人也。大樹の津液が、木づたふ雨のみき 幹を絞り、根に灌いで、そそ 大樹の津液が、木づたふ雨の如く、片濁りしつつか半ば澄んで、ひたくと湛へて居た。かたにご 油即これ 此であつた。

あき 呆れた人々の、目鼻の、眉とともまゆ に動くに似ず、けろりとしたおうよう 蝦蟆が、口で、鷹揚こ に宙に弧を描いて、

「とう。とう、とうく。」

と鳴くにつれて、茸の軸が、ぶるくと動くと、ぽんと言ふやうに釣瓶の箍が噓をした。同時に霧がむらくくと立つて、空洞を

塞ふさぎ、根を包み、幹を騰のぼり、枝に靡なびいた、その霧が、忽たちまこち梢から
 霰しずくとなり、門内もんないに降りそゞいで、やがて小路こうじ一面の雨と成つた
 のである。

官人の、真まつさきに飛退とびいたのは、敢あえて怯おびえたのであるまい……
 衣帯いたいぬの濡ぬれるのを慎つつしんだためであらう。

さて、三太夫さんだゆうが更あらためて礼して、送りつつ、木この葉落葉はおちばにつゝ
 まれた、門際もんぎわの古井戸ふるいどを覗のぞかせた。覗くと、……

「御覽ごらんじまし、殿様。……あの輩やからが仕かまつりまする悪戯あくぎと申しては—
 —つい先日ぞうみずも、雑水ぞうみずに此なる井戸を汲くませまするに水は底に深
 く映うつりまして、……釣瓶つるべはくるくゝとその、まはりまするのに、
 如何いかにしても上のぼらうといたしませぬ。希有けううぢやと申して、邸内ていない

多人たにんず数が立出たちいでまして、力を合せて、曳えい声ごえでぐいと曳ひきますと
 な……殿様。ぽかんと上あがつて、二三人に、はずみで尻餅しりもちを搗つか
 せながらに、アハ、と笑うた化ばけものがござりまする。笑ひ落ちに、
 すぐに井戸の中へ迂すべり込みまする処を、おのれと、奴めの頭を搗つか
 みましたが、帽子だけ抜けて残りしましたで、其それを、さらしものに
 いたしまする気で生垣いけがきに引掛ひきかけて置きました。その帽子が、此
 の頃の雨つゞきに、何と御覧ごらんじまするやうに、恚かの通り。「……
 と言つて指さして見せたのが、雨に沢つやを帯びた、猪口茸いぐちに似た、
 ぶくりとした茸きのこであつた。

やがて、此が知れると、月余げつよ、里さと、小路こうじに油を買つた、其あふの油ら
 好ようして、而しかして価あたいの賤やしを怪あやしんだ人々が、いや、驚おどくまい事か、塩

よ、楊枝ようじよと大騒動おおそうどう。

然しかも、生命いのちを傷つけたるものある事なし、と記しるしてある。

私は此の話がすきである。

何どうも嘘らしい。……

が、雨である。雨だ。雨が降る……寂さみしい川の流ながれとともに、山や家の里まがにびしよくと降る、たそがれのしよぼく雨、雨だ。しぐれが目にかぶ。……

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成」 泉鏡花」 国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」 岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「随筆」

1923（大正12）年11月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雨ばけ

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>